

2006年8月20日 聖霊降臨節第12主日礼拝

『天から助けは来る』

(申命記 13 章 13～16、使徒言行録 23 章 12～22)

パウロは、ユダヤ人達の前で最初の弁明をしました。それは、イエス・キリストへの信仰を弁明する機会でした。パウロは、言いました「死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判に掛けられているのです」。キリストに結ばれて、復活の望みに生かされている。そのことでわたしは裁判に掛けられたのですと。これを聞いたユダヤ人の人々に変化がありました。パウロを訴えていた人々の間に、分裂が起こったのです。サドカイ派の人々は、死者の復活など信じていません。ますます強硬にパウロを攻撃するしてきました。しかし、ファリサイ派の人々の中からパウロを弁護しようとする人が出てきました。「この人には、何の悪い点も見いだせない」(23章9)。こうして、ユダヤ人が真っ二つに割れたのです。論争が激しくなり、千人隊長はパウロがユダヤ人に引き裂かれていしまうと考えました。そこで千人隊長は、強引に兵士達の手でパウロを兵営に連れて行きました。このようにして、パウロの身柄は混乱するユダヤの群衆から助け出されたのです。パウロは、ひとまず困難を切り抜けたかのように見えました。

しかし、事は簡単ではなかったのです。パウロが、ユダヤ人の暴力の手から救い出されて一旦ローマの兵営に留置されてから、一夜が明けました。パウロを有罪にすることが出来なかった、ユダヤ人達の怒りは夜が明けても治まることはありません。ローマの千人隊長たちは、冷静にこの事件を取り扱うつもりでした。しかし、ユダヤ人達は、あくまで強硬な態度を崩さなかったのです。ユダヤ人達は、陰謀を企んで、パウロを殺すまでは飲み食いしないと固く(自分自身にかけて)誓いを立てました。四十人以上の人々が、パウロ殺害の陰謀に加わっていたのです。誓いは、もしも、この誓いを実行しなかった場合には、どのような呪いを受けてもよいという意味の強い意味の誓いだったのです。何と強い意志なのか、と思います。もし、この企みに失敗したら彼らは本当に死ぬまで断食するのでしょうか。しかし、この種の誓いには様々な例外が想定されていました。だから、実際にこうした誓いのために死ぬ人はいなかったのです。「何も食べない」という誓いも、「何も味わわない」という言い抜けが可能でした。実際に、人々の前で大げさに誓いをたてて、それを平気で破ってしまう人が少なくなかったのです。人々のこのような有り様をイエス様は的確に言われています。「『神殿にかけて誓えば、その誓いは無効であるが、神殿の黄金にかけて誓えば、それは果さねばならないという』...また、『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。しかし、その上の供え物の上にかけて誓えば、それは果さねばならない』という。...祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上のすべてのものにかけて誓うのだ。神殿にかけて誓うものは、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ」(マタイ 23章 16-21)と。イエス様が指摘なさったように、わたしたちは、自分で気付かない内に大まじめにこれと似たような軽々しくておろかな事をしているのかもしれない。わたしたち

人間の心は、こうした大げさな振る舞いにごまかされる事があります。しかし、神の目をごまかすことは出来ません。

さて、陰謀を企んだユダヤ人達は、祭司長と長老達のところに行きました。「わたくしたちは、パウロを殺すまでは何も食べないと、固く誓いました」。四十人以上の人がこの計画に参加している事も告げました。そこで、人々は祭司長や長老達に一つ依頼をしました。ローマの千人隊長に頼んでください。パウロの事をもっと詳しく調べるといふ口実で、彼をあなたがたのところへ連れて来るように。最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。こうして、パウロ暗殺の計画は、ユダヤ教の指導者達も加わって綿密になされたのです。このままでは、パウロはユダヤ人達の手へ渡されて人知れず殺されてしまいます。「エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証をしなければならぬ」。主イエスは、昨夜パウロの側に現れて確かにこう言われました。イエス様の約束は、どうなってしまうのでしょうか。パウロの、エルサレム行きを心配していた教会の兄弟姉妹もやって来ません。このままパウロは誰にも助けてもらえないのでしょうか。

しかし、思わぬところから助けがやって来ました。ユダヤ人の企みをパウロの姉妹の息子が知ったのです。パウロに甥がいたことが、ここに初めてわかりました。そしてこの甥は、ここにしか出てきません。パウロの甥とパウロがそれまで、どれくらい親しかったのか。分かりません。非常に仲のよい叔父と甥もいますが、叔父と甥でも疎遠な関係もあります。どのようにして、この情報がパウロの甥に伝わったのか。その経緯についても、聖書は何も書いていません。けれど、とにかくこの情報が、パウロの甥の耳に入りました。それが、パウロを助けることになったのです。パウロの甥は、ユダヤ人達の企みを、パウロに知らせようと即座に行動しました。甥は、パウロが留置されているローマの兵営にやって来て、パウロとの面会を求めました。当時のローマ帝国では、囚人の友達や家族、親戚が面会することは、そんなに難しい手続きもありません。囚人達は、割と自由に家族や友人との面会が許され、食べ物、着るものなどの差し入れを受ける事もできました。パウロの甥も、あまり待たされずにパウロとの面会が許されました。甥は、パウロに会って、ユダヤ人のパウロ暗殺計画について知っている事を打ち明けました。

ユダヤ人達の企みを聞いて、パウロは、早速百人隊長を呼びました。パウロは、百人隊長に頼みました。「この若者を、千人隊長のところへ連れて行ってください。彼は、千人隊長に何か知らせることがあるそうです」。百人隊長は、自分の上司に知らせがあるとは、一体何事なのか。そう質問してもよい立場です。しかし、百人隊長は、何も余計なことは聞かないで、若者を千人隊長のところに連れていきました。百人隊長は、パウロがローマの市民権を持っているから親切にしてくれたのでしょうか。それとも、事が重大で急を要することだと察してくれたのでしょうか。いずれにしても、この情報が、迅速に千人隊長の耳に入った事も天からの助けと言えます。百人隊長は、若者の千人隊長のところに連れて行きました。そして、こう言いました。「囚人パウロがわたしを呼んでこう言いました。こ

の若者をあなたのところに連れて行くように。この若者は、あなたに何か知らせる事があるそうです。」

千人隊長は、若者の手をとって人のいないところに行き、質問しました。「わたしに知らせてほしい事とは何か？」

若者は、答えました。「ユダヤ人達が、パウロのことをもっと詳しく調べたいという口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。しかし、彼らを信じて言うとおりにしては行けません。実は、ユダヤ人達はパウロを調べる気などないのです。彼らは、途中でパウロを殺そうと待ち伏せしています。四十人以上ものユダヤ人達が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓いを立てているのです。彼らは、パウロを暗殺する準備を整えている、と知らせたのです。

千人隊長は、大変な情報を聞いたと思いました。この若者の話しは、どやら正確な情報だと判断しました。千人隊長としては、ユダヤの民衆ともユダヤ教の指導者とも無用な争いはしたくありません。千人隊長は、ローマから派遣された軍を率いて治安を維持する立場にあります。世俗的にはユダヤたち人よりも権力を持っています。とはいえ、地元のユダヤの人々から無用に反発を招くことはしたくない。ユダヤの最高法院からは、外国人にはわからない、ユダヤ人の慣習などに、ついてもいろいろと情報を提供してもらったり、助言を受けてもいたことでしょう。しかし、もし、千人隊長の統括する領内で暗殺事件などが起こったら。千人隊長はその職務に関する能力を、疑われるかもしれません。ユダヤ人とは、衝突を避けたい。しかし、自分の領内での陰謀は防がなくてはならない。そのために、千人隊長は、最善の道を考えました。千人隊長は、この事件を処理する前に、このことを知らせた若者を安全を考えました。千人隊長は、若者に言いました。「今、わたしに知らせたことは決して誰にも話しては行けない」。このように念を押して若者を密かに帰しました。それから、千人隊長はパウロの暗殺計画を未然に防ぐ方法を考えたのです。その夜の内に、パウロはエルサレムからカイサリアへ、総督フェリクスのもとに護送される事になったのです。それは、パウロがローマの市民として正式な裁判を受けるためでした。こうしてパウロは、ここでもパウロの甥や千人隊長の働きを通して命を救われました。千人隊長は、神を信じていたわけではありません。しかし、神様はこの未信者の手を通してパウロの命を救われたのです。こんなふうに、神様はわたしたちが思っても見ないようなところに助け手を送ってくださるのです。わたしたちは、いろいろな事を計画します。しかし、どんなにわたしたちが用意周到に綿密に計画しても、神の御心でなければ何事も成就しないのです。反対に、神の御心であればわたしたちがどんなに無力でも神様は助けくださるのです。ここに巧妙に計画されたユダヤ人の陰謀もここではなりません。神様が、この計画を挫かれたのです。一方、孤立無援に見えたパウロでしたが、神様の不思議な御業によって助け出されたのです。人は、はいろいろと計画します。もしわたしたちの計画が成し遂げられたとしても決して自惚れては行けません。どんなことも、成就させてくださるのは神なのです。わたしたちが、本当に必要な時に助けくださるのは神様で

す。神様の助けを信じて行きましょう。

[説教者：堀地敦子牧師]